

災害遺産と創造的復興

資料

林 行夫(はやし ゆきお)

京都大学地域研究統合情報センター長、教授。専門地域はタイ、ラオスを主とする大陸部東南アジア。研究関心は同地域の上座仏教徒の宗教と社会の動態。なぜ、どのように人はこの世ならぬ世界と関わって地域を築くか。1981年よりタイ、90年代以降ラオス、カンボジア、中国雲南省を含めて実践宗教、民族間関係の地域間比較研究を行い、2006年から同地域の寺院施設と出家者の移動に関する時空間マッピングに従事。



柳澤 雅之(やなぎさわ まさゆき)

京都大学地域研究統合情報センター准教授。専門は農学、農業生態学、ベトナム地域研究。主な研究対象地域はベトナムやインドネシアを中心とする東南アジア全域で、稀にアフリカやアマゾンの森を比較研究のために訪問する。研究関心事は、東南アジアの森林面積が急激に減少する中で、地域ごとに異なる土地利用の変化のメカニズムを統一的に理解することや、人為的につくりだされた植生の生態学的価値の評価とその利用について。



山本 博之(やまもと ひろゆき)

京都大学地域研究統合情報センター准教授。専門はマレーシア地域研究／現代政治史、災害対応と情報、地域研究方法論。博士(学術)(東京大学、2003年)。2003～2004年に在インドネシア・メダン日本国総領事館の委嘱調査員を務めた。科研費プロジェクト基盤(A)「災害対応の地域研究の創出：『防災スマトラ・モデル』の構築とその実践的活用」(2011～2014年度)の研究代表者。



寺田 匡宏(てらだ まさひろ)

京都大学地域研究統合情報センター共同研究員。1971年生まれ。歴史学研究者。災害史や博物館における歴史展示のあり方を研究。これまでに企画した展示として、国立歴史民俗博物館「ドキュメント災害史」展(2003年)、[記憶・歴史・表現]フォーラム「いつかの、だれかに」展(2005年)、歴史伝承委員会「土・くらし・空港」展(2006年)ほか。共編著に『訪ねてみよう戦争を学ぶミュージアム／メモリアル』(岩波ジュニア新書、2006年)、『記憶表現論』(昭和堂、2009年)など。



浜元 聡子(はまもと さとこ)

京都大学東南アジア研究所研究員。専門は東南アジア地域研究、文化人類学。1992年、立命館大学国際関係学部を卒業。2004年、京都大学で博士号(人間・環境学)取得。



原 正一郎(はら しょういちろう)

京都大学地域研究統合情報センター教授。地域情報学(Area Informatics)の創成と資源共有化システムの構築を目指した研究を進めている。特定の地域について異なる視点やテーマから得られた情報を総合的に研究したり、同一テーマについて地域間で比較研究したりする研究を支援する情報モデルやシステムの開発を目指している。近年は、地理情報システムの開発、地名辞書などのシステム構築を行っている。東京大学大学院医学系研究科博士課程修了。学術情報センター助手、国文学研究資料館助教授を経て、2006年8月から現職。



西 芳実(にし よしみ)

京都大学地域研究統合情報センター准教授。専門はインドネシア地域研究、多言語・多宗教地域の災害・紛争対応過程。博士(学術)(東京大学、2007年)。1997~2000年にインドネシア・アチェ州のシアクアラ大学教育学部歴史学科に留学。東京大学大学院「人間の安全保障」プログラム助教等を経て2011年より現職。災害や紛争がもたらす記憶や経験の断絶を繋ぎなおす試みとして、アチェで「タイプライターで書く自分史」プロジェクトに取り組んでいる。



服部 美奈(はっとり みな)

名古屋大学大学院教育発達科学研究科准教授。愛知県生まれ。専門分野は比較教育学・教育人類学。研究テーマはインドネシア・西スマトラにおけるイスラーム教育の歴史的展開、インドネシアの教育改革、ジェンダーと教育など。名古屋大学教育学部卒業。博士(教育学、1999年)。岐阜聖徳学園大学助教授を経て2004年10月より現職。著書に『インドネシアの近代女子教育——イスラーム改革運動のなかの女性』(勁草書房、2001年)、『変貌するインドネシア・イスラーム教育』(共編著、東洋大学アジア文化研究所、2007年)、『途上国における基礎教育支援(下)国際的なアプローチと実践』(共著、学文堂、2008年)などがある。



星川 圭介(ほしかわ けいすけ)

京都大学地域研究統合情報センター助教。専門とする地域はタイ、インドネシアを中心とする東南アジア地域。地域の人々がどのように各地の自然環境に適応し、暮らしを営んできたか、社会・経済状況等の変化によって生き方をどのように変えて来たかをテーマとして研究を行っている。主な研究対象は農村部での生業変化だが、災害によってもたらされた新たな状況に人々が適応していく過程として災害復興過程にも関心をもっている。



ジュリアン・ブルドン・ミヤモト

京都大学地域研究統合情報センター教務補佐員。京都大学大学院情報学研究科社会情報学専攻社会情報ネットワーク講座博士課程(広域情報ネットワーク分野)。主に異文化コラボレーションと多言語ウェブサイトにおけるローカライゼーションパターンに関する研究を行う。Université de Caen Basse-Normandie情報科学科卒業、Université de Saint-Etienne修士号取得(ウェブインテリジェンス)。University of Sheffield情報学研究科に留学。2011年より地域研究統合情報センター地域情報学プロジェクトのシステム開発を担当。



亀山 恵理子(かめやま えりこ)

奈良県立大学地域創造学部講師。1972年生まれ。専門は東ティモール、インドネシアをフィールドとした社会開発研究。学部時代にインドネシア語を学び、その後援助機関のスタッフとして東ティモールとインドネシアのアチェで紛争後・災害後の復興支援活動にたずさわる。言語文化学修士(大阪外国語大学、1998年)、開発学修士(Institute of Social Studies、2006年)。



牧 紀男(まきのりお)

京都大学防災研究所巨大災害研究センター准教授。1968年京都市生まれ。1991年京都大学工学部建築学科卒業。1997年に京都大学大学院工学研究科で博士(工学)を取得。京都大学大学院工学研究科助手などを経て2005年より現職。専門は、防災計画、災害復興計画、危機管理システム、すまいの災害誌。著書に『災害の住宅誌』(鹿島出版会、2011年)、『組織の危機管理入門—リスクにどう立ち向えばいいのか』(京大人気講義シリーズ、丸善、2008年)、『はじめて学ぶ都市計画』(市ヶ谷出版、2008年)などがある。



学術交流協定の締結

京都大学地域研究統合情報センター (CIAS) は、本国際シンポジウム／ワークショップ期間中の2011年12月24日に、インドネシアの国立シアクラ大学津波防災研究センター (TDMRC) と研究交流および協力の基本協定を締結した。CIASから林行夫センター長、原正一郎副センター長、西芳実准教授、柳澤雅之准教授、山本博之准教授、星川圭介助教、ジュリアン・ブルドン研究員がインドネシア共和国アチェ州バンダアチェ市を訪問し、協定文書に調印した。

この協定の締結により、日本とインドネシアにおける地域情報学分野の研究者の協力を拡充し、人的交流と情報の共有手段を提供し、若手研究者の招へいと派遣についても努力することが合意された。

アチェ州は、2004年12月のインド洋津波により死者・行方不明者16万5,000人の被害を受け、現在も復興の途上にある。地域にねざした復興を進め、その経験を世界のほかの地域に意味のあるかたちで伝えるために、地域研究と地域情報学の方法が求められている。

調印式の後、研究協力協定締結記念ラウンド・テーブルを開催し、ムハンマド・ディルハムシャー TDMRC センター長、リダTDMRC 副センター長らと研究協力について意見交換を行い、相互理解を深めた。



研究協力のあり方をめぐって
討議したラウンド・テーブル



協定に調印した林行夫地域研究統合情報
センター長(右)とムハンマド・ディルハム
シャー津波防災研究センター長(左)



ラウンド・テーブルには、双方の機関から各7名が参加

現地報道記事の紹介

シンポジウム／ワークショップの様子は現地の複数メディアで報道された。

●じゃかるた新聞 2011年12月27日

JSTIJICA、京大など

震災の経験、世界に発信 アチエで7周年シンポ

スマートラ沖地震・津波が構（JST）と国際協力機構（JICA）が連携した地球規模課題対応国際科学技術協力事業「インドネシアにおける地震火山の総合防災策」の一環で、京都大・地域研究統合情報センター、アチエのシヤークアラ大・津波防災研究センターが協力し、二十一日から二十六日まで、アチエ州パンドンアチエ市で国際シンポジウム・ワークショップ「災害遺産と創造的復興―地域情報学の知見を活用して」を開催した。

JSTIJICA協力事業で「地域文化に即した防災・復興概念」の研究を担当してきた京大の山本博之教授のグループなどを中心に行われ、インドネシア側と研究成果を共有することを目指す。州政府や研究者、地元小中学校の教員ら毎日約百人が参加した。主に、同事業と京大が開発してきた「災害地域情報マッピング・システム」の活用方法などについて議論した。

自然災害やその他の事件・事故などの記事が地図上に記録され、その場所では何が起きたかを時系列で把握することができるといふのは、震災発生後の支援時に地元政府や諸外国の援助団体が即座にその地域に関する情報を共有できることを目的に開発された。

被災地の姿容が分かることで、津波被害の跡地を観光開発につなげようとしているアチエの取り組みに生かすこともできる。

二十一日のシンポジウムであいさつしたアチエ州のイルワンディ・ユスフ知事は「災害の情報を世界と共有するシステムを考えていかなければならない」と述べ、マッピング・システムを評価。「東日本大震災で被災した日本とともに、被災と復興の情報を共有、整理して世界に発信していきたい」と語った。

シンポジウムに参加した京大の西芳実・准教授は「東日本大震災後、アチエの人々は『自分たちの経験を生かしてほしい』『同じ経験をしたい』という思いが強い」と語り、マッピング・システムは「アチエの経験を世界に開く懸け橋になる」と強調した。

●Serambi Indonesia 2011年12月27日



SERAMBI/BUDI PATRIA

PARA peserta Simposium Internasional dan Workshop tentang Warisan Bencana serta Upaya Ekonomi Kreatif dari Jepang, berkunjung ke News-room Harian Serambi Indonesia, Minggu (25/12) sore. Delegasi itu dipimpin Dr Hiroyuki Yamamoto dari Kyoto University, disambut Redpel Serambi, Yarmen Dinamika.

Tsunami Mobile Museum Oleh-oleh Jepang untuk Aceh

Cara Aceh membangkitkan diri pascatsunami telah menjadi contoh baik bagi Jepang. Negeri Sakura itu pun memberi oleh-oleh untuk Aceh berupa Tsunami Mobile Museum, selain menanam bunga kertas.

Oleh **Hendra Syahputra**

Geempa tektonik dan gelombang tsunami menyapu sebagian Aceh pada 26 Desember 2004. Ratusan ribu jiwa melayang. Jepang, mengalami hal serupa dengan Aceh pada 11 Maret 2011. Belasan ribu jiwa melayang.

Seperti juga Aceh, masyarakat Jepang pun pernah menghadapi masa sulit. Terlebih dalam upaya rekonstruksi dan rehabilitasi pascabencana alam itu. Kerja keras harus tetap dilakukan, karena hidup harus terus berlanjut.

Sepenggal kalimat itu membuka percakapan saya dengan Prof dr Hayashi Yukio, Direktur Center for Integrated Area Studies (CIAS), Kyoto University, Jepang.

Hayashi tak sendiri. Turut bersamanya menemani saya berdiskusi: Prof dr Yanagisawa Masayuki (ahli bidang pertanian dan agraria), Prof dr Yamamoto Hiroyuki, Prof dr Hara Shoichiro (ahli bidang area informatics), dan Prof dr Nishi Yoshimi (ahli bidang penanggulangan sosial terhadap bencana alam dan konflik).

Hayashi mengatakan, pengalaman masyarakat Aceh yang telah berusaha

dalam upaya rehabilitasi dan rekonstruksi (rehab-rekon) pascabencana alam 26 Desember 2004 sangat membekas di benak masyarakat Jepang.

"Bencana adalah kejadian yang tragis, namun bencana membuka hubungan baru antara kedua masyarakat yang terlanda bencana alam terdahulunya, yaitu masyarakat Indonesia (khususnya masyarakat Aceh) dan masyarakat Jepang," ujar Hayashi.

Para profesor dari Jepang itu pun berhasrat memperkuat hubungan kerjasama Aceh-Jepang lebih lanjut. Mereka tak ingin membiarkan hubungan yang telah terjatuh itu terbengkalai begitu saja.

Caranya, mereka berinisiatif mengumpulkan pengalaman Aceh membangkitkan diri pascatsunami 2004 dalam data dan informasi. Pendokumentasian itu diberi nama Aceh Digital Museum atau Tsunami Mobile Museum.

Dalam melakukannya, Hayashi dibantu Yamamoto dan Nishi. Mereka kemudian mengumpulkan semua arsip dan data tentang bencana Aceh. Semua pengalaman masing-masing negara



Anak-anak korban tsunami di Kecamatan Lhoknga, Kabupaten Aceh Besar, Senin (26/12), menanam bunga masa depan (Shisui Mirai no Hanadan) yang dikirim masyarakat Kobe, Jepang di Lapangan Pantai Lempuk, Kecamatan Lhoknga, Aceh Besar saat peringatan tujuh tahun tsunami Aceh.

(Aceh dan Jepang) dalam upaya mengatasi dampak bencana tersebut yang mereka temukan dikumpulkan dan disatukan. Pengalaman kedua negara itu nantinya bisa dimanfaatkan masyarakat negara lain yang menghadapi bencana alam di masa mendatang.

Yamamoto dan Nishi mulai mencari

bahan pada masa rehab-rekon. Menurut mereka, masyarakat yang hidup pascabencana di tengah pelaksanaan rehab-rekon sangat kooperatif (mau bekerjasama). Hal itu membantu Yamamoto dan Nishi dalam mengumpulkan dan meninjau berbagai informasi baru untuk membangun komunitas sosial baru.

Mereka paham, saat proses rehab-rekon sedang berjalan, ada banyak informasi yang tak sempat disusun dan disimpan secara teratur oleh masyarakat korban bencana. Bahkan ada informasi penting yang dibiarkan begitu saja. Nah, keduanya memanfaatkan informasi-informasi demikian untuk melengkapi data-data yang dibutuhkan dalam pembuatan Tsunami Mobile Museum.

Usai meraup bahan, Yamamoto dan rekannya berencana melakukan symposium dan workshop untuk mengenalkan konsep yang sedang dikembangkan, yaitu Aceh Digital Museum. Dalam menyusun Aceh Digital Museum itu, mereka melakukan kajian area informatics, yaitu ilmu pengetahuan aplikasi informasi berdasarkan hasil pengetahuan.

"Area studies dapat digunakan sebagai alat yang menyusun dan menyimpan informasi dengan cara terbuka pada umum, agar informasi tersebut bisa dimanfaatkan untuk meningkatkan kehidupan masyarakat," ujar Yamamoto.

Area studies merupakan suatu ilmu pengetahuan untuk mengaplikasikan kearifan hasil kajian akademis sesuai dengan keadaan dan kebutuhan masyarakat masing-masing wilayah.

Dengan area studies, hasil kajian politik, ekonomi, agraria, mitigasi bencana, dan lain lain akan dapat dimanfaatkan sesuai dengan keadaan dan kebutuhan lokal dengan cara lebih tepat.

Area studies itu merupakan suatu metodologi yang dapat memudahkan tukar-menukar informasi dari jenis yang berbeda dengan menggunakan komputer dan teknologi informasi seperti, sistem database, satelit, analisa multilinguistik, dan lain lainnya seperti gambar foto, manuskrip, dokumen-dokumen, buku, catatan tangan yang dapat ditempatkan di atas peta virtual yang ditetapkan di spasi layar komputer.

Peta virtual menjadi suatu platform yang menghubungkan berbagai infor-

masi dan memberi suatu gambaran masyarakat lokal dengan kearifan lokal. Sistem pemetaan itu bisa memanfaatkan berbagai informasi sesuai dengan tujuan masing-masing, misalnya bidang pariwisata bencana, edutainment, dan kajian sejarah.

Beberapa waktu lalu, Yamamoto, Nishi, dan teman-temannya kemudian menggelar symposium (workshop) internasional di Banda Aceh selama 22-26 Desember 2011. Workshop itu untuk mempertimbangkan bagaimana konsep Tsunami Mobile Museum dapat diimplementasikan di Banda Aceh, dalam rangka refleksi tujuh tahun tsunami Aceh.

Area informatics dalam bentuk Tsunami Mobile Museum, menurut Yamamoto, tak berfungsi kalau tak ada niat dan minat masyarakat. Perlu juga kerjasama antara berbagai lembaga dan pihak yang bertanggungjawab sesuai dengan tujuannya.

"Kalau sudah berhasil menciptakan kerjasama tersebut, kita yakin bahwa dengan area informatics ini Indonesia, khususnya Aceh, akan menjadi suatu daerah modal untuk mengembangkan perekonomian kreatif pascabencana alam, terlebih dengan negara-negara lain di dunia," kata Yamamoto.

Mungkin saja Indonesia menjadi teladan penanggulangan bencana alam secara kreatif bagi negara-negara lain termasuk Jepang yang sedang menjalankan proses rehab-rekon.

Dalam workshop tersebut, mereka mengajak semua peserta mengumpulkan masing-masing pengetahuan, pengalaman, informasi, dan misti sendiri untuk memberi sumbangsih pengetahuan bagi siapa saja.

"Kami dari Kyoto University, Jepang, mengharapkan symposium/workshop ini akan menjadi suatu penolong untuk membuka halaman baru untuk hubungan antara masyarakat Indonesia (Aceh) dengan masyarakat Jepang dalam bidang area informatics," kata Yamamoto.

"Ini sedikit oleh-oleh dari kami untuk masyarakat Aceh," sambung Yamamoto sembari memperlihatkan alamat Tsunami Mobile Museum: disaster.net.cias.kyoto-u.ac.jp/Aceh.J.

Di situs itu, terdapat database lengkap mengenai gempa dan tsunami Sumatera 26 Desember 2004. Ia mulai beroperasi 5 Oktober 2009. ■

●記事タイトル

津波モバイル博物館
日本からアチェへの贈り物

●記事リード

津波からの復興を遂げたアチェの経験は日本にとってよい参照すべき例となる。そして日本も津波モバイル博物館という贈り物をアチェに提供してくれた。